

23

幸田

豊坂小学校

ナルセ ミサト
成瀬 美里

分科会番号

7

分科会名

美術教育

仲間と豊かにかかわり合い、つくる喜びを感じることができる子どもの育成

～4年図画工作 「みんなにSDGsを伝え隊！

～学校もりあげマスコット～」の実践を通して～

1 主題設定の理由

本学級の子どもたちは、休み時間に、身近な割りばしやダンボールなどの材料を用いてミニチュアをつくり出す子や、タブレットを活用して絵を描くなど、造形的な技術を使いこなせる子どもが多い。図画工作科の授業では、4年生になり周りの目が気になることも増え、型にはまった造形や写實的に描くことを目指してしまい、自分の作品に自信をもてなくなっている現状がある。しかし、このことはとりもなおさず、他者への関心が高まっていることも示している。このように、視野が広がっている子どもたちに、友人の発想やアイデアに関心をもったり、自分の表現を紹介し合ったりするかかわりの場を設け、そのかかわりの中での気づきからさらに工夫をしていく活動の時間を設けることが造形的能力の向上に必要だと考えた。本研究では、仲間とともに生活や社会の中の形や色などと豊かにかかわり合い、表したいことや表し方を自分で決め、自分の思いを生かしつつ、つくる喜びを感じることができる単元を構想し、実践することとした。

2 研究の構想

(1) 目指す子ども像

- ア 表したい事のイメージをもつとともに、学習過程で身につけた知識や技能を生かしながら、進んで表現活動をすることができる。
- イ 友達や先人の作品を見たり、話し合ったりするなかで、自分とは違った見方、感じ方や発想を知り、それを生かして表現を工夫することができる。
- ウ 主体的・対話的な学びを通して、培った資質や能力を次の制作や日常生活のなかで活用することができる。

(2) 研究の仮説と手だて

目指す子ども像アに対する仮説Ⅰ

他教科と関連させた体験的な活動を通して題材と出合わせ、子どもが必要と感じる技能を段階的に習得させれば、子どもの思いがふくらみ、創造的につくったり、表したりすることができるであろう。

手だてⅠ 子どもの思いをつくる単元の導入の工夫（他教科での学びや自分の生活を振り返る中で生まれた、他者に伝えたいという目的意識にそった作品例の提示）

他教科と関連させた単元を考える。他教科とからめて伝えたい思いをもたせ、その思いから自分なら何を表現したいのか考え、試行錯誤しながら制作する場をつくることで、主体的に学び続けられるようにする。また単元に入る前に、マスコット作りのイメージや作りたいという思いをもたせるために、教師作成のマスコットの見本を用意する。また、「それらのマスコットが何を伝えているのか」「思いを伝えるためにどのような色や形を使っているのか」について、話し合いの場を設ける。

手だてⅡ 子どもの現状をもとにした授業展開の工夫（子どもが何を必要としているか見

極め、段階を踏んで技能を習得できるようにする)

本実践では「SDGsを全校のみんなに伝えたい」という目標を目指して制作活動に取り組む。そのために教師のモデル作品を使って、どのように伝えていくのか子どもと計画を立てる。企画の進み具合を把握し、次にやらなければならない課題を明確にしていきながら進める。子どもとともに伝える活動の計画を立てていくことで、主体的に学び続けられるようにする。また制作過程において、つまずきそうな場面を見極め、技術支援をする。

目指す子ども像イ・ウに対する仮説Ⅱ

造形的なねらいを明確にした「かかわり合い」の場を設定するとともに、自らの成長を振り返らせれば、考え方や発想が広がり、それを自分の作品に生かす。そして、その力を別の場面で生かしていこうとする意欲をもつであろう。

手だてⅢ 造形的な見方や考え方を焦点化した「かかわり合い」の場の設定

自分の表現や持っている感覚やイメージを大切にし、さらに広げていけるように、子ども同士で鑑賞をする場を多く設ける。互いの作品と工夫した点を紹介し合い、よいところを見つけたりより思いが伝わるにはどうしたらよいのか話し合ったりする。その際に、造形的な見方や考え方に焦点化できるようにする。

手だてⅣ 子どもが発見したことや考えたことを振り返る場の設定

単元の中で自分の学習を振り返る時間を設定する。新たな表現の習得や他者とのかかわりのなかで生まれた自分の成長などを記録していくことで、自らの考えや発想が広がったことを確認できるようにする。

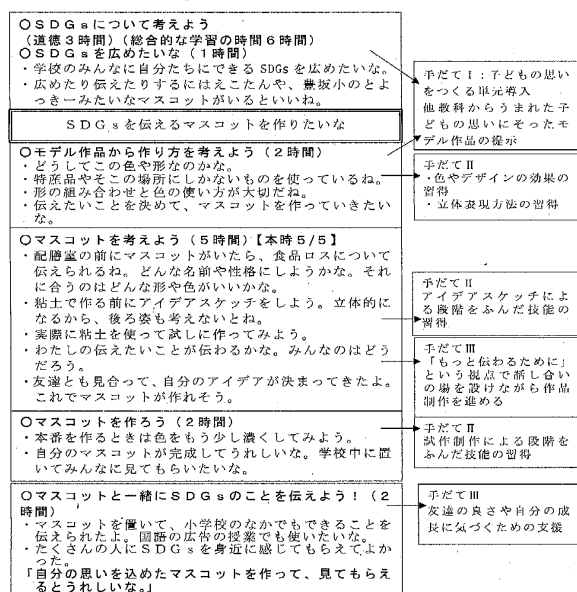
3 研究計画

(1) 研究対象 4年生27名

(2) 仮説の検証方法

抽出児童Aを中心に学級全体の変容を追ひ、検証する。児童Aは、自分のやってみたいことを自分で調べ、自分の考えをもつことができる。1学期の図画工作科の授業では、多くのことに興味をもち、友達と意見を交流し、楽しみながら制作をしていた。しかし、うまく表現できず、作品を改良しようとするのをあきらめてしまう姿があった。本題材では、伝えたい思いをもとに場所や物から想像を広げ、他者とかかわる中で、自分の表現したいものに合った色や形を選びながら、粘り強く表現できるようにしたい。また、話し合いの場で、友達と考えを共有することで、課題を見つけ解決していこうとする力を育成し、自分の思いや願いを広げていくことを期待したい。

(3) 単元構想図



4 研究の実践と考察

(1)「キャラクターの伝えたいことを考えよう」子どもの思いをつくる単元導入【第1時】手だてⅠ

単元に入る前に社会科の浄水場見学で学んだ水の大切さとクリーンセンターで学んだ3Rの学習を思い出させた。また、サントリーの出前授業でエコについて教えてもらったことから、SDGsという言葉へのつながりを意識させた。詳しく知っている子、言葉だけ知っている子など様々であった。その様子からSDGsの17のゴールについて総合的な学習の時間に一人調べを行い、学習を深めていくことにした。それぞれで調べたことを全体でまとめていき学級全体でSDGsの知識をつけた上で単元に入って

いった。

単元の導入では、SDGsを訴えかけるためのマスコットのモデル作品とそのマスコットを学校の中のSDGsの目標と関連のあるところに置いて撮影した写真をモデル作品として提示し

【資料1】提示した教師のモデル作品



た(資料1)。そのマスコットにどのような特徴があり、どんなことを伝えようとしているのかを全体で話し合った。キャラクターの特徴として、「体に12番のマークがついている」「ドングリに森の絵がついている」「おなかに3番のマークがついている」などの形に関する特徴と「12番のマークの色になっている」「ピンクで明るい感じ」「体にやさしそうな色」などの色に関する特徴があがった。教師作成のマスコットのモデル作品をもとに、子どもらしい創造力豊かな考えや気づきがあり、全体を通して発想が広がっていった。

教師のモデル作品から伝わる思いや意図について意見を交流した後、これからみんなは何をしたいか問いかけた。すると、「わたしもキャラクターを作りたい」と、制作に意欲的な意見が出てきた。

児童Aの振り返りには、「写真一枚で結構キャラクターの伝えたいことが伝わってきた。身近なところにSDGsがあるから探してみたい」「みんなに伝えられそう」と書かれており、キャラクターを用いてSDGsを伝えたいという思いや願いをもち始めていることが分かる。SDGsについての思いをもたせてからモデル作品を提示したことにより、子どものデザインや色に対する意図への気づきが多くなった。

(2)「思いが伝わるようにアイデアスケッチをしよう」子どもの現状をもとにした授業展開の工夫【第2・3時】手だてⅡ

教師のモデル作品を鑑賞し、そのキャラクターが何を伝え、どうしてそう感じたのか理由を話し合った。そのときにデザインのマークや、色の特徴にも気づかせることで思いを伝えるために大切なことをおさえておいた。さらに、他者がどのように受け取るのかということと、その感じ方の違いのおもしろさを感じ、表現の幅を広げていく。教師のモデル作品を見て考えているうちに、作ってみたいという思いが膨らんだ子どもたちの姿から、思いを形にしていくために、「アイデアスケッチ」を作成することにした。まず今まで学習してきたSDGsの知識の中から自分の伝えたいSDGsのゴールを選

児童Aのアイデアスケッチ



び、伝えたいことが伝わる場所探しに行き、選んだ。1回目の探検の際には「物を大切に」「整理整頓」などの12番の目標「つくる責任つかう責任」に対するものに偏った。全体で自分の見つけてきた場所を共有していくにつれ、12番だけでなく、10番の「国際理解」についてや、社会でも学習した6番の「水を大切にしたい」と、7番の「エネルギーの大切さ」など、発想が広がってきた。全体で個々の見つけたものを共有したことにより、新たな視点で場所を見つけに行くことができた分かる。

学級で見つけてきた場所から、自分の一番伝えたいそれぞれの思いを書かせると、児童Aは、社会科でも勉強し、実際に防災教室で学んだ11番の目標「住み続けられるまちづくり」について興味をもった。今までの学習の積み重ねと全体での共有をもとに、作りたいマスコットのイメージがわき、伝えたい思いが明確になってきた状態でアイデアスケッチの制作に入った。

アイデアスケッチをする際には、実際に自分が置きたい場所の写真に描画ツールを用いて描きこんでよいことを伝えた。実際の写真に表すことで、完成作品のイメージがわき、納得のいくアイデアスケッチができたことが、児童Aの振り返りの「5つ（自己評価）の理由はがんばって集中して考えられた」からもうかがえる。また、「考えるのに時間が結構かかった」「先生たちがつくったものの大変さが伝わってきた」という言葉から、本人が自分の思いに向き合い、表現しようと熱心に考えたことが分かる。

（３）「友達と見合ってもっと思いが伝わるようにしよう」造形的な見方や考え方を焦点化した「かかわり合い」の場【第４・５時】手だてⅢ

それぞれどんなキャラクターを作りたいかを考えているうちに、学級の中には友達の様子を気にする子も出始めた。そこで、今まで教師作品を用いて学習してきた、思いが伝わるためのデザインと色の重要性を確認してからグループで鑑賞し合った。ここでは伝えたい思いが似ている子どもでグループを構成した。その中で共通点を探したり、新しい視点を与えあったりすることを期待した。一つ一つの作品に意見を出し合い、全員が話し合いに参加できるよう、３，４人のグループにした。自分のアイデアスケッチを発表する前時までに、一人一人「紹介カード」を作成した。自分の伝えたい目標の番号、内容、マスコットが伝えている思い、それを表現するための自分なりの工夫を書いた。実際にグループでの話し合いが始まると、グループの子のアイデアスケッチを真剣に見合い、「なるほどね」「そういうことか」「だからその形なんだね」と思いとマスコットを対比しながら友達の思いに耳を傾けていた。紹介が終わると、すぐにタブレットを操作しアイデアスケッチを修正する子どもの姿が見られた。表現にあった色や形に注目した工夫や表し方を友達と話し合ったことで、自分たちの思いがより明確になったと考えられる。児童Aの振り返りには、「自分では分からないアドバイスもいっぱい出てきた」「次はアドバイスも生かして試作品を作りたい」と書かれていることから、自分の見方や感じ方を深め、マスコット作りに対する新たな思いをもつことができたと考えられる。

（４）「マスコットの試作品をつくろう」段階を踏んだ技術の習得【第６・７時】手だてⅡ

アイデアスケッチが子どもの中でかたまったら、実際に紙粘土で立体にしていく。本制作に入るまえに、子どもが材料の性質を知ることができるよう、実際の紙粘土を用いて試作品を作ることにした。その際、立体化に必要な知識と技能に自分たちで気づけられるように教師のモデル作品を観察するように促した（資料２）。実際に手に取り、四方から観察すると、紙粘土だけではなく様々な材料を使っていることに気づいた。プラスチック容器や針金、爪楊枝、目のシールなど次々に気づきをつぶやいた。立体的な造形には欠かせない芯材が必要であると子どもが気づき、それを確認してから、実際に紙粘土で試作を始めた。児童Aは、体を作る際に、アルミホイルを丸めて中に入れたり、頭と体をつなげる際には爪楊枝を入れたりと芯材を上手に使っていた。また、子どもの中にはアイデアスケッチの中に芯材を描き入れてから制作する子どももあり、計画的に自分の表現したいものに近づけようとする姿も見られた。試作品の制作中「うまく色が混ざらない」や「パーツがうまくくっつかない」など苦戦しながら試作品を作った。児童Aも「作るほうが簡単じゃなかった」と実際に立体に表現する困難を感じていた。しかし、「反省点もあるから本番は失敗したところに気をつけてつくりたい」と振り返りに書き、紙粘土を用いた試作品の制作で得た技術から、本番によりよい物を作ろうと意欲を高めていった。

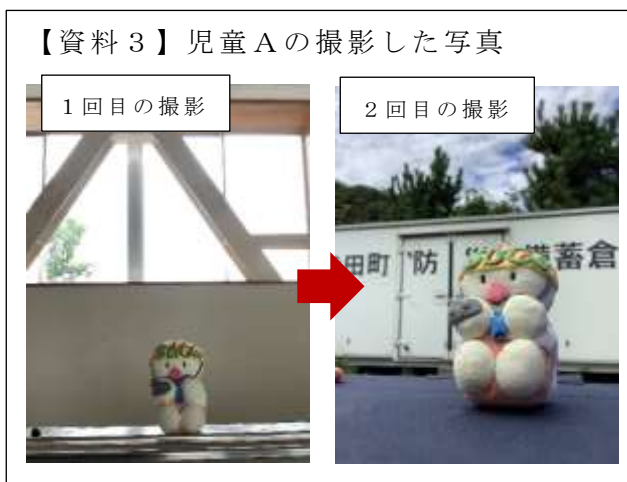
（５）「試作品をみんなで見合っただけアドバイスをもっとよくしよう」造形的な見方や考え方を焦点化した「かかわり合い」の場【第８時】手だてⅢ

作品制作を進めていく中で、キャラクターの工夫点や改善点を鑑賞し合う時間を多く設けていった。今回は試作品を見せ合いながら子どもが自分の作品の伝えたい思いと工夫点を伝え、グループでアドバイスし合った。今までは同じ目標の番号の子とアドバイスをし合っていたが「思いが伝わる」ということに重きをおき、本当に伝わるのかを考えらえる

よう、ちがう目標の番号の子とグループを作って中間鑑賞を行った。作品を見合い、話し合うことで、発想を広げながら自分の思いを再確認するきっかけになったと考えられる。グループで試作品を見合った後に書いた振り返りでは「改善点があったし、本番作るときアドバイスをいかしてもっといい作品を作りたい」と書いた。さらに、もらったアドバイスを振り返りに詳しく記述し、次時に自分が具体的にどのように改善するか明確にすることができた。また、同じグループで話し合い、児童Aからアドバイスをもらった児童は「自分で思っていなかったことを友達が言ってくれた」「アドバイスのあったことを本番にいかしたい（緑以外で黄色を使ったり）」と振り返りに書いたことから、相手の思いをくみ取ったアドバイスをし合えたことがわかる。

（６）「マスコットと一緒にSDGsのことを伝えよう！」造形的な見方や考え方を焦点化した「かかわり合い」の場【第１２時】手だてⅢ

本制作が完成し、実際に思いを伝えたい場所に行き写真を撮影した。児童Aはアイデアスケッチにもあったように、窓の耐震の仕組みに注目し、そこで写真を撮影した。同じ目標の子たちと写真を撮影しに行った後、ちがう目標の番号で組んだグループで写真を見合った。伝えたい事が伝わるのかを話し合ったあと、もう一度写真撮影に向かった。その際児童Aが「どうしよう、窓の耐震の柵みたいなのが何か分からなくて伝わらない」と悩んでいた。グループで校内を歩き探していると社会科の学習で知った防災備蓄倉庫の存在に気づき、１回目から場所を変えて撮影をした。「写真に上手く入らない」と苦戦していると、友達が声をかけ、協力し合って撮影をすることができた（資料３）。児童Aの振り返りには「前の写真のことをみんながどう思っているか知れた」「防災カメール（キャラクターの名前）の言いたい事が伝わるいい写真が撮れた。5の理由は前よりもいい写真がとれたから。」と書かれており友達のアドバイスをもとに改良し、協力し、よりよい作品ができた達成感を味わったことが分かる。学級全体でも自分たちの作品に自信をもち、貼りに行きたいという気持ちをもつ子どもが多かった。



（７）「マスコットと一緒にSDGsのことを伝えよう！」子どもが発見したことや考えたことを振り返る場の設定【第１３～１７時】手だてⅣ

単元のゴールとしてSDGsを全校に伝える計画を考えた。子どもたちからは「全校のみんなに見てもらえるところに貼りたい」という声があがった。話し合う中で自分たちの作品に対して自信をもち、伝えたい、見てもらいたいという思いが徐々に表れていた。子どもたちで話し合った結果、伝えたい思いに合った場所に貼ることになった。校内に貼るだけでなく、地域の人も来てくれるから学芸会でも展示したいという思いが出てきた。そこで学芸会でも展示することにした。学芸会の振り返りでは「お父さんにポスターを見せたら「なるほど」とか「たしかに」などポスターでもSDGsを伝えらえた」「自分なりに目標を達成できた」と書き、目標を達成し、自分の作品を人に見てもらったことへの喜びを感じていたことが分かる。

５ 研究の成果

本研究に取り組むにあたり、目指す子ども像に近づけるようにするために２つの仮説を立てて検証を進めてきた。成果と課題を以下にまとめる。

（１）仮説Ⅰに対する手だてについて

手だてⅠについて、他者に伝えたいという子どもの目的意識にそった作品例を提示する

ことで、「自分もやってみたい」という子どもの意欲を引き出すことができた。

事前に他教科で学習を深め、その上でモデル作品と出会わせたことが、主体的に学びに向かうスタートとなったことが児童Aの「防災カメール」というカメをモチーフにした作品や紹介文からも分かる。また、「思いを伝えるために」という目的意識をもって子どもと単元を作ってきたことで、「思いを伝える」という言葉が普段の生活に多く出てきた。学芸会での学年目標を話し合う際にも、「思いを伝えたい」という意見が多く出た。そして「協力して思いが伝わる学芸会」となった。このことから子どもが「伝えたい」という思いを強く持ち続けていたことが分かる。

手だてⅡについては、アイデアスケッチや、紙粘土を用いた試作を行ったことで、何度も自分の作品と思いを見つめ直し、改良することができた。第7時の児童Aの振り返りからも自分たちで課題を見つけ、主体的に学び続けていくことができたことがわかる。また、タブレットの描画ツールを使ったことで、写真や画像を簡単に修正したり記録したりすることができ、自分自身の思いを明確に表現することに役立った。

（２）仮説Ⅱに対する手だてについて

手だてⅢについては、アイデアスケッチや試作品の制作ごとに中間鑑賞の時間を多く設け設けたことで、自分の思いを明確に表現することができた。また、友達からアドバイスをもらい自分の作品に取り入れて発想を広げることに役立った。さらに、「色や形に注目する」といった、視点を明確にした話し合いの場を多く設けたことで、新しい気づきが生まれ、学級全体の発想と表現も広がっていった。

手だてⅣについては、自分の活動を振り返る時間を多く設けたことで、自分たちの活動の目的を常に大切にし、ゴールに向かって主体的に活動し続けることができた。第12時の「どうしよう。伝わらないよ」と撮影場所に困っていた児童Aの様子からも、「伝えるため」という思いをもち続けることができていた。さらに自分の課題を見つけ、次にどうしたらいいのかを子どもたち自身で考えて主体的に進めていくことができるようになった。また、教師も子どものふりかえりから、子どもにとって必要な支援を見極め、子どもに寄り添ったアプローチをすることに役立った。単元を通して相手意識をもって、子どもたち同士で試行錯誤しながら、作り上げていく喜びを感じることができた。

また、児童Aが宿題の日記に芸術祭へ行ったことを書いてきた。そこで見た作品に対し、自分の考えをもったうえで作者の「これからどうなるんだろう。とかその先の希望もあるかな。と思って希望のお花や少し明るい色にした」という制作意図を知り、「だからこの絵はぱっと見明るい絵だと思うけど、本当は暗いところもあるというテーマにそった自分の中のすてきな一まいだ」と思います。」と書いた。このことから児童Aの中に思いを伝えるためには色や形に注目することという造形的な見方や考え方が身に付いているといえる。そして、自分の日常生活のなかで生かしていくことに役立った。

6 今後の課題

アイデアスケッチや試作品制作後の自分の作品を紹介する活動では、どの子も自分の思いを友達に伝え、友達の作品のよさを見つけることができていた。しかし、友達の悩みに対してのアドバイスにグループごとで差があった。本実践の取り組みにより、子どもたちの造形的なスキルの一定の向上が確認されたが、友達にアドバイスできるまでの高まりがあったかと考えたとき、物足りなさを感じざるを得ない。話し合いの中で友達に具体的なアドバイスができるようになるまで表現のスキルを高めていくことが必要だと感じた。そのためにも、個々の力をより丁寧に見取り、それぞれのスキルをさらに高められるように、教師が支援の方法についてさらに学ぶことが必要である。